

PC-3 中間的な強さの否定極性項目の認可子としての「～ 損なう」

長谷部郁子（筑波大学非常勤講師）

要旨

日本語の統語的複合動詞「V+損なう」を取り扱う本発表では、事象の不成立（影山 (2012)）を表すアスペクト表現であり、「少しも」のような NPI を認可できない「～ 損なう」は、「どこへも」や「誰にも」のような「中間的な強さの NPI (van der Wouden (1997))」の認可子であると主張する。更に、中間的な強さの NPI に加え、弱い NPI をも認可できる「拒否する」に比べ、「～ 損なう」は存在量化表現（飯田 (2009)）である中間的な強さの NPI のみを認可する、NPI の認可の範囲が限定的な認可子であると論じる。最後に、「損なう」が単にアスペクトを表すだけでなく、同時に NPI の認可子でもあることを示す本分析は複合動詞研究の更なる発展に寄与し、コンテキストに量化の対象を限定される NPI と、その NPI の認可に特化した認可子の存在を主張することは、NPI 研究の発展にも繋がると結論する。

0. はじめに

†本発表で取り扱う表現：複合動詞「V+損なう」 e.g. 書き損なう, 行き損なう, 着き損なう
事象の不成立を表す「損なう」（影山 (2012)）「損ねる」も同様

†「損なう」と否定辞：否定極性項目（NPI）の認可

- (1) 連休中に旅行に行く予定だったが、怪我をしたので、私はどこへも行き損なった。／連休中、私は顔を見たかった友だちの誰にも会い損なった。(cf. どこへも行かなかった／誰にも会わなかった)
- (2) *私は書類の文章を少しも書き損なった。(cf. 書類の文章を少しも書き損なわなかった。／少しだけ書き損なった)

強い NPI は認可できない（由本 (2005) も参照）が、中間的な強さの NPI は認可

†本発表の目的

- (3)
 - a. 「～損なう」は、「中間的な強さの否定極性項目 (NPIs of medium strength)」(van der Wouden (1997), 吉村 (2000)) の認可子であると主張する。
 - b. 「～損なう」が認可できる中間的な強さの NPI は、存在量化表現(飯田 (2009)) に限定されると論じる。
 - c. アスペクト表現である「～損なう」が NPI の認可子であると分析し、コンテキストに量化の対象を限定される NPI と、その NPI の認可に特化した認可子の存在を主張することは、複合動詞研究と NPI 研究の発展に寄与すると結論する。

1. 「V+～損なう」: 否定的な意味「事象の不成立」

†NPI の認可 (再掲)

(1) 連休中に旅行に行く予定だったが、怪我をしたので、私はどこへも行き損なった。／連休中、私は顔を見たかった友だちの誰にも会い損なった。

(2) *私は書類の文章を少しも書き損なった。

→「どこへも」と「誰にも」は認可されるが、「少しも」は認可されない。

†否定極性項目 (NPI) の定義と、3段階の強弱 何らかの否定辞により NPI が認可

(4) NPI: Negative polarity items (NPIs) are expressions that can only appear felicitously in negative contexts. (van der Wouden (1997: 61))

(5) Laws of polarity (van der Wouden (1997: 130), 吉村 (2000)も参照)

a. Weak NPIs are expressions that can occur felicitously in monotone decreasing contexts.

b. NPIs of medium strength may be licensed by anti-additive contexts but not by downward monotonic ones.

c. Strong NPIs may only be licensed by anti-morphic contexts.

monotone decreasing 特性: 最も弱い否定文脈を与える特性 (NPI が現れる全環境で成立)

anti-additive 特性: 中間的な否定文脈を与える特性

anti-morphic 特性: 最も強い否定文脈を与える特性

「せいぜい」: monotone decreasing / 「拒否する」: anti-additive / 「ない」: anti-morphic

(6) 花子はアルコールを少しも飲まなかった。

(7) a. *花子はアルコールを少しも飲むことを拒否した。

b. *もし花子がアルコールを少しも飲めば、忘年会が楽しくなるだろう。

c. *女性の中でアルコールを少しも飲んだのは、せいぜい5人だ。

d. *花子はアルコールを少しも飲んだ。

(五十嵐 (2011: 46), 下線発表者)

(6): 「少しも」は否定環境のみに生起可能な強い NPI

(7): 否定を含意する動詞「拒否する」、条件節「もし」、「せいぜい」、肯定環境は NPI である「少しも」を認可できず、否定辞「ない」のみ認可が可能。

← (2): 「～損なう」は強い NPI を認可できない。(1)の「どこへも」や「誰にも」は?

(8) a. ヒラリー夫人は、その日体調が悪かったので、どこへも行くことを拒否した。／*合宿の間、どこへも出かけたのは、せいぜい3人だ。／*もしどこへも出かけるなら、メモを残しておいてください。

b. 誰にも話すことを拒否している。／*もし誰にも相談したら、うまく行くだろう。／*誰にも相談したのは、せいぜい3人だ。(bは下線筆者)

(吉村 (2000: 966-968))

(8)の「どこへも」や「誰にも」:「拒否する」により中間的な強さの否定文脈のみで認可
←「～損なう」は、中間的な強さの NPI のみ認可できる。

- (9) a. 花子はアルコールを少しでも飲むことを拒否した。
b. もし花子がアルコールを少しでも飲めば、忘年会が楽しくなるだろう。
c. 女性の中でアルコールを少しでも飲んだのは、せいぜい5人だ。
d. *花子はアルコールを少しでも飲んだ。

(五十嵐 (2011: 46), 下線発表者)

(9)の「少しでも」: (7)の「少しも」より幅広い環境で許容

- (10) *私は書類の文章を少しでも書き損なった。(cf. (2)) / 私は依頼された記事を少し
でも書くことを拒否した。

「拒否する」: 中間的な強さ～弱い NPI を認可 「～ 損なう」: 中間的な強さの NPI のみ認可

† 最小の量を表す NPI である minimizer (Horn (2001)): 弱い NPI 「1行でも」など

- (11) *私は難しい英作文の問題で1行でも書き損なった。(cf. もし英作文の問題で1行でも
書いていけば、もっとテストの点数が取れていたかもしれない / あの難しい英作文の問題で1行でも書けたのは、クラスでせいぜい数人だ) / 私はその依頼された記事を1行
でも書くことを拒否した。

← 「～ 損なう」: 「1行でも」を認可不可能 「拒否する」: 「1行でも」を認可可能

† 1節まとめ:

「～ 損なう」: 中間的な強さの NPI のみ認可 「拒否する」: 中間的～弱い NPI を認可可能
→ 「～ 損なう」: 「拒否する」に比べ、最小の量を表さない中間的な強さの NPI のみを認可する、NPI の認可の範囲が限定的な認可子であると言える。

→ では、「～ 損なう」が認可する「どこへも」や「誰にも」は、どんな性質の NPI?

2. 存在量化表現 (飯田 (2009))

† 「どこか」と「誰か」: 場所と人に限定された存在量化表現 (飯田 (2009: 15))
量化の対象の範囲: 使用される (会話などの) コンテキストによっても限定される

- (12) A: 太郎が誰かに叱られたんだって。
B: でも、この場の誰も太郎を叱っていない。誰に叱られたんだろう。
(飯田 (2009: 15) の例を改変、下線筆者)

(12)の「誰か」の量化の対象: A と B が知らない人に限定 → 発言に矛盾は生じない

(1) 連休中に旅行に行く予定だったが、怪我をしたので、私はどこへも行き損なった。／連休中、私は顔を見たかった友だちの誰にも会い損なった。

(1)の「どこへも」と「誰にも」：場所と人に限定された存在量化表現

(13) 「～損なう」はコンテキストにより量化の対象を限定される中間的な強さの NPI の認可に特化した認可子である。

(1)の「どこへも」の量化の対象：「旅行先の候補地」（コンテキストにより限定）

(1)の「誰にも」が量化の対象：「顔を見たかった友達」（コンテキストにより限定）

† 反例？：「NらしいN」表現（長谷部（2021））

(14) この3年間、色々と出費がかさんで、貯金らしい貯金をし損ねた。

- (15) a. 浪費家の父は、貯金らしい貯金を少しでもするのを拒否した。
b. もし、雨らしい雨が少しでも降れば、水不足は解消するだろう。
c. 今夏、雨らしい雨が少しでも降ったのは、せいぜい4、5日間だった。

（長谷部（2021: 336））

(15)：「NらしいN」は、「拒否する」「もし～」「せいぜい」によって認可される弱い NPI

← (14)：中間的な強さの NPI の認可に特化した認可子である「～損なう」が認可

(16) 「NらしいN」の2つの用法

- a. N といえる基準値を理想的に満たしている N
b. N といえる最低限の基準値を満たしている N

- (17) a. 研究らしい研究ができなかった。
b. 研究といえる最低限の基準値を満たす研究ができなかった。

（長谷部（2021: 339））

弱い NPI としての「NらしいN」：(16b) 「最低限の基準値」 minimizer

← (11)の「1行でも」（minimizer）は認可できない「～損なう」、「NらしいN」は認可

→ 「～損なう」が「NらしいN」表現を認可できる事実は、本分析にとっての反例？

† 否定的なコンテキストによる NPI 認可

- (18) a. *私は去年、貯金らしい貯金をした。
b. （これまではできなかったが）最近、ようやく、貯金らしい貯金ができるようになった。

- (19) a. {ずっと雨が降らなかったが、昨日／*毎日雨続きで、昨日も}、雨らしい雨が降った。
 b. 今年も、ちゃんと研究らしい研究ができて良かった。

(長谷部 (2021: 334))

(18a): 肯定環境では認可されず (18b): () 内の否定的なコンテキストにより認可

(19a): 2つのコンテキストのうち、否定的なコンテキストの場合にのみ認可

(19b): 言外の否定的コンテキスト (ちゃんと研究ができない可能性) があれば認可

→ 「NらしいN」は、「ない」のような否定辞や、「拒否する」のような否定を含意する認可子が存在しなくても、否定的なコンテキストの含意があれば認可されうるという点で、他の弱いNPIとは性質が異なる (cf. (9d), (11))。

(20) a. * (これまで飲めなかったが) 今日、花子はアルコールを少しでも飲めた。

b. * (これまでは書けなかったが) 今回の試験では、私は難しい英作文の問題で1行でも書けた。

(16b)の「最低限の基準値」: コンテキストにより決定される (e.g. (17b))。

→ コンテキストによって「量化の対象」が決定されうる存在量化表現と類似している。

→ 「NらしいN」: (9)や(11)の弱いNPIより、存在量化表現に近い性質を持つ。

→ 「～損なう」: 「NらしいN」を認可することができる。

† NPIの認可 (長谷部 (2021))

(21) 日本語のNPIの認可: 強いNPIはanti-morphicな要素である否定の認可子により統語構造においてc-commandされることにより認可されなければならないが、弱いNPIは統語構造でのc-commandのみならず、否定を含意する様々な認可子や否定的なコンテキストを含む環境において認可されうる。

(長谷部 (2021: 338))

統語派生における、否定辞によるNPIの認可: Klima (1964), Kishimoto (2018)

(22) 中間的なNPIは、何らかの演算子や、存在量化を否定する要素により、統語構造上、または論理意味部門に相当するインターフェイスで認可されうる。

「～損なう」「拒否する」: 存在量化対象を項として含む事象の不成立 (= 成立の否定)

→ 「～損なう」: コンテキストにより決まる「最低限の基準値」を持つNPIの「基準値」の存在を否定することにより、そのNPIを認可する否定的コンテキストを含意する (= 認可子となる)ことができる。

3. アスペクト表現としての統語的複合動詞

† 統語的複合動詞 (影山 (1993))

(23) 書き損なう / 行き損なう / 私は時間通りに宿に着き損なった (cf. *荷物が着き損な
た) / 先生に褒められ損なった

(23): 主語の制限はあるが、統語構造において「損なう」補部に選択する V の制限が少
なく、V を受動態にすることも可能 → 「V+損なう」は統語的複合動詞 (影山 (1993))

「V+始まる/終わる」: 「V が表す事象の開始・終了」を表すアスペクト表現 (影山 (2012))

「V+損なう」: 「V が表す事象の不成立」を表すアスペクト表現

← 「～ 損なう」: 存在量化対象を項として含む事象の成立を否定する NPI の認可子

→ 「V+損なう」: 「V が表す事象の不成立」を表すアスペクト表現であり、存在量化対象を項
として含む事象の成立を否定する NPI の認可子でもある統語的複合動詞

4. 結論

「V+損なう」が「事象の不成立」というアスペクトを表すだけでなく、V が表す事象内の中
間的な強さの NPI の認可子として機能することを明らかにする。

→ 本研究は複合動詞研究の更なる発展に寄与する。

コンテクストに量化の対象を限定される NPI と、その NPI の認可に特化した認可子の存在を
主張する。 → NPI 研究の発展に繋がる。

参考文献

長谷部郁子 (2021) 「日本語の「NらしいN」表現と「基準値」について」, 『言語研究の楽しさ
と楽しみ 伊藤たかね先生退職記念論文集』, 333-342. 開拓社, 東京.

Horn, Laurence R. (2001) *A Natural History of Negation*, 2nd ed., CSLI Publications, Stanford.

五十嵐祐太 (2011) 「極性項目の認可条件に関する一考察」, 『岩手大学大学院人文社会科学研
究科紀要』第 20 号, 39-49.

飯田隆 (2009) 「量化と受身」日本科学哲学会第 42 回大会シンポジウム・ワークショップの
資料 http://pssj.info/program_ver1/program_data_ver1/42/ws/iida.pdf.

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房, 東京.

影山太郎 (2012) 「複合動詞の形態構造と自他交替」国際シンポジウム「日本語の自他と項交
替」における講演 (於国立国語研究所) .

Kishimoto, Hideki. (2018) “Projection of Negative Scope in Japanese,” 『言語研究』153, 5–39.

Klima, Edward S. (1964) “Negation in English,” In Jerry A. Fodor and Jerrold J. Katz (eds.) *The*

Structure of Language, 246–323. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

van der Wouden, T. (1997) *Negative Contexts: Collocation, Polarity and Multiple Negation*. Routledge, London.

吉村あき子 (2000) 「日本語の否定環境」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』, 961-972. 英宝社, 東京.

由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味統語』 ひつじ書房, 東京.